

詩篇145－150篇 「ハレルヤ詩篇」

1A とこしえの御国 145

1B 主の偉大さ 1-7

2B 豊かな憐れみ 8-13

3B 必要に応じた満たし 14-21

2A 主に望みを置く幸い 146

1B 救いのない君主 1-4

2B 虐げられる者への擁護 5-10

3A シオンにおける賛美 147

1B 小さき者への愛 1-11

2B 御言葉による平和 12-20

4A 天地における賛美 148

1B 天における賛美 1-6

2B 地における賛美 7-14

5A 御民の賛美 149

1B 新しい歌 1-4

2B 諸刃の剣 5-95-9

6A 楽器を奏でるほめ歌 150

本文

詩篇の学び、今日で最後まで読みます。145 篇からです。

1A とこしえの御国 145

145 ダビデの賛美

138 篇から始まった、ダビデの賛歌の最後になります。ダビデがこれまで、自分の苦しみを主に申し上げ、敵からの救いを祈り、いろいろな試練を辿りましたが、彼はしっかりと見ていた幻がありました。それが「御国」です。主が王として、永久に治めておられるという御国がダビデの中では、信仰の中ではっきりとしていました。日頃の信仰生活に安定と、深い理解が与えられていたのです。パウロは、ルステラで石打ちに遭い、しかし死んでおられず立ち上がって、再び福音を語り始めました。それは彼の頑張りや信心深さではなく、残された弟子たちに「私たちが神の国にはいるには、多くの苦しみを経なければならない。(使徒 14:22)」と言ったからです。キリストによって到来する神の国があまりにも鮮やかに、彼の信仰の中で明らかにされていたのです。それで、苦しみに耐えることができました。ダビデの信仰を支えていた御国の幻を共に読んでいきましょう。

1B 主の偉大さ 1-7

145:1 私の神、王よ。私はあなたをあがめます。あなたの御名を世々限りなく、ほめたたえます。

145:2 日ごとにあなたをほめたたえ、あなたの御名を世々限りなく賛美します。

ダビデは、神を「王よ」と呼んでいます。それはこの世を治めておられるからです。人としては、それは世から世へと、時代から時代へと変遷してここにまで来ました。しかし、神の御国は永久に続くのです。そしてそれを「日ごとに」ほめたたえる、というところが大事です。神の永遠の御国は、私たちの日常生活から離れたところにある、銀河系のような存在ではありません。むしろ、いつもの生活の中に現実のものとして、神の永遠をもたらしています。日頃行っている、主に仕えることが、後の時代に永遠の報いとして償われるのですから。

145:3 主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。

145:4 代は代へと、あなたのみわざをほめ歌い、あなたの大能のわざを告げ知らせるでしょう。

145:5 私は栄光輝くあなたの主権と、あなたの奇しいわざに思いを潜めます。145:6 人々はあなたの恐ろしいみわざの力を語り、私はあなたの偉大さを述べるでしょう。145:7 人々はあなたの豊かないつくしみの思い出を熱心に語り、あなたの義を高らかに歌うでしょう。

主が宇宙や自然界で示しておられる御業、そして人々の営みと歴史の中で示しておられる御業、そして何よりも神を信じ、その福音を信じる者たちの間で行われた御業、その偉大さを、代々人々が告げ知らせます。それを歌の中で行い、また語りの中で行います。ユーチューブで、ある教会が詩篇 145 篇をそのまま歌っているものを見つけました。そのままメロディーを付けて歌うのです。それはもはや、学びの対象ではなく、私たちの魂と体に沁みこませていくような営みです。

そして、神の力とその偉大さ、威厳についてほめたたえているところから、主の豊かな慈しみについて語り、歌っている部分に入ります。神の御国は、その永遠の力と主権であり、その力が弱き者、はかない者、過ちを繰り返す者たちに慈しみとして向けられます。

2B 豊かな憐れみ 8-13

145:8 主は情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵みに富んでおられます。145:9 主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは、造られたすべてのものの上にあります。

8 節の言葉は、詩編に何度となく出てきましたが、それは元々、主がシナイ山においてモーセにご自身の御名を明らかにされた時のものです。それ以来、主はイスラエルの民に、いやここに書かれているように、すべて造られた者の上にその慈しみを施してくださっています。ヨナ書には、ニネベの人々、その家畜にまで及ぶ神の憐れみが書いてあります。

主は情け深く、憐れみ深く、怒るのに遅く、恵みに富んでいる、この言葉を決して忘れないでくだ

さい。神の御国、その統治は、神のこれらの性質を通して進んでいきます。私たちを急ぎ立て、要求し、強いて何かをやらせるというものは、この世のもの、サタンによる支配です。聖霊は、私たちに罪の自覚を与え、神への恐れを与えられますが、それは促しであり、その促しには神の慈しみがあります。そして神は、私たちが少し間違いをして、それを取り上げて責め立てる方ではありません。主の御手はいつも、愛に満ち、それが叱責であっても、そこには癒しの力を持っているものであります。

145:10 主よ。あなたの造られたすべてのものは、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめたたえます。145:11 彼らはあなたの王国の栄光を告げ、あなたの大能のわざを、語るでしょう。145:12 こうして人の子らに、主の大能のわざと、主の王国の輝かしい栄光を、知らせましょう。145:13 あなたの王国は、永遠にわたる王国。あなたの統治は、代々限りなく続きます。

永遠の統治を知っているのは、「聖徒」たちです。聖徒というのは、「神の所有のものとなるために、聖め別たれた者」たちのことです。神の偉大さ、その慈しみを知ることができるように、神が選び、他の人々から別けてくださった者たちです。イエス・キリストを信じる者たちは、「聖徒」と呼ばれています。それは、私たちが神の国の栄光を告げ知らせていく責務を担っているからです。私たちは、このように小さな群れですが、しかし世界の教会と共に、実はこの世は永遠の御国の中で動いていることを証していることに他なりません。

3B 必要に応じた満たし 14-21

145:14 主は倒れる者をみなささえ、かがんでいる者をみな起こされます。145:15 すべての目は、あなたを待ち望んでいます。あなたは時になんて、彼らに食物を与えられます。145:16 あなたは御手を開き、すべての生けるものの願いを満たされます。145:17 主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。

主なる神の国は、恵み深さにおいてこの地上で明らかにされていきます。私たちが、しっかりしている人々の中で神の国が存在し、そうではない者たちは埒外だと思ったら、大きな間違いです。倒れている者を支えるところに、かがんでいる者たちを起こされるところに、神はご自分の国を現されます。そして、人々の基本的な必要、食事であるとか、そのような生活の基本を神は責任をもって賄っておられます。私たちはどんなことがあっても、乏しくなることはありません。それは神がそのような方だからです。

145:18 主を呼び求める者すべて、まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。145:19 また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。145:20 すべて主を愛する者は主が守られる。しかし、悪者はすべて滅ぼされる。145:21 私の口が主の誉れを語り、すべて肉なる者が聖なる御名を世々限りなくほめたたえますように。

そして最後に、神の国は主を呼び求める者たちに、その願いをかなえ、叫びを聞かれることによって現われます。教会に対して、神は祈ることを命じておられますが、それは永遠の統治が教会によって現われることを願っておられるからです。「ヨハネ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」私がしばし、「教会は聖書の学びによっては生まれません。祈りによって生まれます。」と話しました。もちろん、使徒たちの教えを堅く守るという活動は主体的に行います。しかし、祈りによってのみその実体が御霊によって現われるのです。

ですから、祈りや祈り会を強調してもしすぎることはありません。どんどん祈ってください！祈り会にも来て、教会全体で聖霊が何をしておられるのかを感じ取ってください。私が礼拝の時に報告しますが、それは祈り心で聞いていただきたいからです。「教会は、何かこんな行事が行われているな。」ではなく、神の御国がどのような形で現われているのか、それを祈って見守っていくために報告しています。

それから主を愛する者を主が守られるという約束があります。先日、改めて献金についての教えを恵比寿バイブルスタディでしました。やもめが献金箱に入れたことを読んだからです(ルカ 21章)。犠牲を伴う献金です。しかし、それはその人に対して主は必ず与えてくださるという霊的原則があり、その人をひもじくすることは決してありません。もちろん、やもめを食いつぶすという悪い宗教者たちの存在がありますが、神に対しては決して裏切られることはありません。主は喜んで捧げることを愛されます。捧げるだけでなく、主の御心を喜んで行なう者たちを必ず守ってください。こうやって、御国は広がっていくのです。

2A 主に望みを置く幸い 146

そして146篇から150篇までは、「ハレルヤ詩篇」と呼ばれます。詩歌の始まりとその終わりが、「ハレルヤ」になっているからです。ハレルヤは、「神をほめたたえる」という意味ですが、キリスト者にとっては特別な言葉です。このハレルヤと、アーメンについては、世界のキリスト者が自分たちの言語に翻訳せず、そのまま使っているので、私たちは心と意思を一つにしてハレルヤと歌うことができます。

1B 救いのない君主 1-4

146:1 ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。146:2 私は生きているかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう。146:3 君主たちにたよってはならない。救いのない人間の子に。146:4 その息が絶えると、その者はおのれの土に帰り、その日のうちに彼のもろもろの計画は滅びうせる。

145篇で、ダビデがとこしえの御国について賛美しました。神がすべてを支配して、とこしえの支配しておられるのだという事実です。145篇から150篇までのハレルヤ詩篇は、バビロンから捕え

移された民が帰還して、それで歌っていると言われるものですが、イスラエルの民は神こそが王であるという国を求めず、しばしば人を自分たちの王として失敗してきました。

主はエジプトから大いなる業を彼らに示されて、この方こそが王であることを示されました。けれども、約束の地に入ってから周囲の異邦人たちの王たちの姿があり、それが私たちにも必要だと考えるようになったのです。そして求めて、主が許容されたのがサウル王です。主はダビデを立てられ、神を愛する王によってその国は神に支配されましたが、その後はうまくいきませんでした。自分たちが御霊に支配されて神を王とするのではなく、王に丸投げして安心を得ようと思いました。それがイスラエルの王、ユダヤの王たち自身もその罠に陥り、アッシリヤが来た時にはシリヤの王、エジプトの王に抛り頼むことさえしたのです。

それで痛い思いをして、バビロンから帰還しました。それでようやく、「主こそが私たちの王である」という信仰告白へ至ったのです。しかしユダヤ人は、イエス様を王として認めず、「カエザルこそが私たちの王です。」と宗教指導者が言いました。しかし、そのカエザルがエルサレムの神殿を後に破壊するようになるのです。

ここから私たちは分かります。私たちは、「イエス・キリストを王、支配者としなくて、何か他のものに救いを求める。」という過ちを犯しているということです。自分の心の中ではイエスを主としていないので、そこに御国が広がることなく、他のものに頼るためにつぶされてしまうのです。ですから、ここで立ち上がる必要があります。その時に必要なのは、目に見えるもの、力あるもの、安定しているもの、これらにもものは「単なる息にしか過ぎない」ということを告白することです。

2B 虐げられる者への擁護 5-10

146:5 幸いなことよ。ヤコブの神を助けとし、その神、主に望みを置く者は。146:6 主は天と地と海とその中のいっさいを造った方。とこしえまでも真実を守り、146:7 しいたげられる者のためにさばきを行ない、飢えた者にパンを与える方。主は捕われ人を解放される。146:8 主は盲人の目をあけ、主はかがんでいる者を起こされる。主は正しい者を愛し、146:9 主は在留異国人を守り、みなしごとやもめをささえられる。しかし主は悪者の道を曲げられる。146:10 主は、とこしえまでも統べ治められる。シオンよ。あなたの神は代々にいます。ハレルヤ。

人にしか過ぎない君主に対して、ヤコブの神を助けとして、望みをおく者は幸いです。146 篇は、145 篇におけるダビデの賛美の具体的適用です。人ではなく、まことの神による統治の中に入ろうという勧めです。主はすべてのものを造られ、真実をとこしえに守られます。そして弱い者、捕われの人々、盲人など、そういった人々にその偉大な力を現されます。ですから、パウロの言った「わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。(2コリント 12:9)」です。そして私たち教会も、この統治の中にいるには、弱められている人々のところに届くように動くのです。

3A シオンにおける賛美 147

1B 小さき者への愛 1-11

147:1 ハレルヤ。まことに、われらの神にほめ歌を歌うのは良い。まことに楽しく、賛美は美しい。

147:2 主はエルサレムを建てイスラエルの追い散らされた者を集める。

これはおそらく、ユダヤ人がバビロンから帰還して、そしてネヘミヤによって城壁の再建が完成し、そして城壁を神に奉献するために、聖歌隊を城壁の上で歩かせた、その時に歌ったのではないかとされています(ネヘミヤ 12 章)。こうあります。「12:43 こうして、彼らはその日、数多くのいけにえをささげて喜び歌った。神が彼らを大いに喜ばせてくださったからである。女も子どもも喜び歌ったので、エルサレムの喜びの声ははるか遠くまで聞こえた。」主が確かに、イスラエルの散らされた者たちを集められました。

147:3 主は心の打ち砕かれた者をいやし彼らの傷を包む。147:4 主は星の数を数え、そのすべてに名をつける。147:5 われらの主は偉大であり、力に富み、その英知は測りがたい。147:6 主は心の貧しい者をささえ、悪者を地面に引き降ろす。147:7 感謝をもって主に歌え。立琴でわれらの神にほめ歌を歌え。

バビロン捕囚によって、帰還の民は心が傷つき、打ち砕かれていました。それは自分たちの罪のため、神に対する反抗のためでした。しかし主は、その憐れみによって癒し、慰め、祝福してくださいます。そして、「主は星の数を数え、そのすべてに名をつける。」と歌っていますが、これはすごいことです。無数の星を主が支配しておられ、所有しておられる偉大な力を持っていることを教えてくださいます。そして、その力をもって心の貧しい者を支えて、悪者は低められます。

そしてもう一つ、「主は星の数を数え、そのすべてに名をつける。」には、イスラエルの民にとってはアブラハムへの約束を思い起こさせるものであったでしょう。主がアブラハムに、夜空の星を見せて、「あなたの子孫はこのようになる。」と約束されました。アブラハムの子孫それぞれを数えておられて、名を付けておられます。主は、その一人一人を覚えておられます。その星の輝きは、聖徒一人一人の義の行いであることが、ダニエル 12 章 3 節にあります。人間が見たら、それは僅かな光の輝きかもしれません。しかし主は数えておられて、名前さえ書き記しておられるのです。ヘブル人への手紙に、聖徒たちに対する励ましの言葉があります。「ヘブル 6:10 神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」

147:8 神は雲で天をおおい、地のために雨を備え、また、山々に草を生えさせ、147:9 獣に、また、鳴く鳥の子に食物を与える方。147:10 神は馬の力を喜ばず、歩兵を好まない。147:11 主を恐れる者と御恵みを待ち望む者とを主は好まれる。

ヨブ記においてもそうでしたが、主はこの天を動かしておられるだけでなく、その天候をもすべて動かされて、鳴く鳥の子にまで心を使っておられる方であることが分かります。主は小さき者たちに、心を持っておられる方です。小さき者をつまずかせるなら、碾き臼に首をゆわえつけられて、湖の中に沈みこまれたほうがましである、と主は言われました。

そこで再び、目に見える力に頼るなという勧めが行われています。馬の力、歩兵を主は好まれません。何を好まれるか？主を恐れること、そして主の恵みを待ち望む者です。すばらしいです、主の恵みを待ち望むというのは、私たちが全く無力であることをその前に認めなければいけません。自分では全くすることができない、その心打ち砕かれた者たちが受けることのできるものです。恵みは、受けるに値しない者が受ける祝福ですから。

2B 御言葉による平和 12-20

147:12 エルサレムよ。主をほめ歌え。シオンよ。あなたの神をほめたたえよ。147:13 主は、あなたの門のかんぬきを強め、あなたの中にいる子らを祝福しておられるからだ。

今、再建された城壁の中における祝福を信じて、主をほめたたえています。門のかんぬきを強めるとは、敵からの守りを神が与えてくださるということです。安全保障、安心感が主ご自身にある人は幸いですね。そして、エルサレムに住む者たちはまだその時、少なかったのですが、子孫が増えることを信じています。私たちが祈りましょう、主に自らを捧げる人たちが、その神の子孫が多くこの教会にも与えられることを。

147:14 主は、あなたの地境に平和を置き、最良の小麦であなたを満たされる。147:15 主は地に命令を送られる。そのことばはすみやかに走る。147:16 主は羊毛のように雪を降らせ、灰のように霜をまかれる。147:17 主は氷をパンくずのように投げつける。だれがその寒さに耐ええようか。147:18 主が、みことばを送って、これらを溶かし、ご自分の風を吹かせると、水は流れる。

イスラエルに帰還した人たちが、その地境が平和に守られること、そして収穫を期待できることを約束しています。ここで大事なのは、その天候が主の言葉によって与えられたことです。エリヤがアハブ王に対して、「私のことばによらなければ、ここ二、三年の間は露も雨も降らないであろう。(1列王 17:1)」と言いました。主の言葉によって天における自然現象が起きます。

そしてここでは、雪を降らせることを詩人は歌っています。どうしてでしょうか？この雪によって、イスラエルは寒さで凍えています。しかし、その雪や氷がなければ、雪解けによる水が生まれ出ず、それで作物の収穫は望めません。そうです、これは自然における神の慈しみを示しているし、イスラエルに対する神の慈しみを示しています。彼らにとってバビロン捕囚は、極寒の冬のようにであったかもしれません。その奴隷状態は苛酷なものでした。しかし、それがなければ彼らは、自分たちに主なる神がおられることを知ることはできませんでした。自分たちが偶像から離れなければいけ

ないことを、知ることはなかったでしょう。

罪を悔い改めるための悲しみは、すばらしい結果をもたらします。「2コリント 7:9-10 今は喜んで
います。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなた
がたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。神の
みこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死
をもたらします。」普通には害と思われることも、神の民にとっては癒しとなり、救いの力となります。

147:19 主はヤコブには、みことばを、イスラエルには、おきてとさばきを告げられる。147:20 主
は、どんな国々にも、このようには、なさらなかった。さばきについて彼らは知っていない。ハレル
ヤ。

神に選ばれた民と、そうではない人々の間にある違いは何でしょうか？ そう、こうした神の取り計
らいを聖書の言葉によって知っているのか、知らないのかの違いであります。神の御言葉が与え
られていることが、私たちにとっての幸いであり、恵みです。

4A 天地における賛美 148

次は、天と地がその創造主である神をほめたたえる歌です。

1B 天における賛美 1-6

148:1 ハレルヤ。天において主をほめたたえよ。いと高き所で主をほめたたえよ。148:2 主をほ
めたたえよ。すべての御使いよ。主をほめたたえよ。主の万軍よ。148:3 主をほめたたえよ。日よ。
月よ。主をほめたたえよ。すべての輝く星よ。148:4 主をほめたたえよ。天の天よ。天の上にある
水よ。148:5 彼らに主の名をほめたたえさせよ。主が命じて、彼らが造られた。

天における神の栄光をほめたたえています。聖書には少なくとも、三つの天が記されています。
第一の天は、空です。ここにもあるように、日や月、星を眺めることのできる天があります。第二の
天は新約聖書で「空中」と書かれています。そこに主権を持っている者、力のある者たち、すなわ
ち天使たちが動いています。主に仕えている天使もいれば、墮落してサタンの手先となっている墮
落した天使たちもいます。そして第三の天、使徒パウロがパラダイスと呼んだところで、一節、「い
と高き所」と書かれている部分です。神が王として着座されているところ。ここでは、主の御座
のすぐそばにおいて主をほめたたえ、それから御使いたちに賛美を呼びかけ、それから天体に対
して賛美を呼びかけています。4 節にある、「天の天」また「天の上にある水」というのは、創世記 1
章に、水が分かれてその間に大空ができた、と書いてあります。下には海となった水がありますが、
上にも水がありました。

これら全てが、主をほめたたえるように命じられています。なぜか？ 5 節に「主が命じられて、

彼らが造られた」とあるからです。造られた者が造った方をほめたたえるのは、当然のことです。黙示録4章において、天的な存在が神を礼拝している姿を見ることができます。そして二十四人の長老が、こう言いました。「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。(黙示 4:11)」創造された方が、創造したのから栄光と誉れと力を受けるのです。

(ある時に、牧者チャック・スミスが、教会の姉妹のためにその家を訪問しました。彼女がずっと祈っている夫、精神科と神経外科の医師だったそうです。姉妹はチャックと奥さんのケイを食事に招いて、それで二人は台所に引きさがって、チャックとその旦那さんが話せるようにしました。数時間の話し合いの末、彼は主に自分の人生を明け渡すことができました。次の日、その姉妹が飛んでチャックの事務所にやってきました。プレゼントも持って来ました。「チャック先生！あなたでしたら、できると思っていました。」それでチャックが言ったのです、「ちょっと待ってください。あなたの旦那さんは、その分野で一流の医者です。動脈瘤のクリッピング手術を成功させたとします。その後、患者さんが飛んでやって来て、『このメスはなんとすばらしいのでしょうか。あなたなら、できるはずです！その刃の鋭さと言い、なんと素晴らしいでしょう。』」お分かりですね、器ではなく、その器を用いられた神の知恵と力がほめたたえられるべきなのです。

天においては、この誘惑が大きかったでしょう。黙示録を見ると、1章に出てくる栄光の姿のイエス様と似たような輝きをもった天使が七人、七つの鉢の災害の時に出てきます。似たような輝きを持っていますが、イエス様は父なる神の栄光の現われであり、天使は単に神の栄光を反映させているにしかすぎません。使徒ヨハネが誤って御使いを拝もうとしたら、「やめなさい、私もあなたと同じ神のしもべです。神を拝みなさい。(19:10 参照)」と言いました。そしてその誘惑に負けたのが、サタンです。彼は御座のそばにいた、美の極みを持つ御使いでしたが、それゆえ墮落しました。主に用いられればそれだけ、自分自身が栄光を受けるという高慢の罪に陥る危険があります。)

148:6 主は彼らを、世々限りなく立てられた。主は過ぎ去ることのない定めを置かれた。

145 篇において、ダビデが世々に渡る御国を語りました。天において神の栄光を見ることができるのは、その太陽や月、星の輝きが、いつまでも変わりなく続いているということです。もちろん、神の日が来て、天と地の万象が崩れるときに今の月や星、太陽はなくなります。けれども、いつまでも続いているということで、私たちは人の栄光ではなく、神の栄光がどのようなものかを知ることができます。数多くの人が、花火のような輝きを求めます。花火のほうがはるかに明るくて、華やかです。しかし、その花火がなくなった時にまだ残っている、星の輝きがあります。私たちが求めるべきは、人には認められなくても永続する輝きです。

2B 地における賛美 7-14

次は地における賛美です。

148:7 地において主をほめたたえよ。海の巨獣よ。すべての淵よ。148:8 火よ。雹よ。雪よ。煙よ。みことばを行なうあらしよ。148:9 山々よ。すべての丘よ。実のなる木よ。すべての杉よ。148:10 獣よ。すべての家畜よ。はうものよ。翼のある鳥よ。148:11 地の王たちよ。すべての国民よ。君主たちよ。地のすべてのさばきづかさよ。148:12 若い男よ。若い女よ。年老いた者と若い者よ。

地上において、あらゆる生き物が主をほめたたえ、さらに自然にあるものも主をほめたたえます。そして大事なものは、その後地上の王たち、国民、裁き司と続いているのです。これはどういうことか？天も地も、自然界は神の權威に服従しています。神に齒向かったのは、天においてサタンやその手下どもだけで、自然界においては、動物は神の秩序の中に入れられているのです。しかし、人は神のかたちに造られました。ゆえに、神と同じように自由意志を持っています。ゆえに、神に対しては意志をもって、神を愛するがゆえに服従する自由があるし、また責任があるのです。

ところが、神に似た者として造られているので、むしろ神から独立して生きようとしたのがアダムの罪であり、その後人間の姿です。神によって与えられた力と權威があるために、その權威を与えた神に逆らおうとします。「2:2-3 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」しかし、これらの王は再臨のキリストによってその力を打ち砕かれます。そして地上において、神の御子にひれ伏すようになるのです。

148:13 彼らに主の名をほめたたえさせよ。主の御名だけがあがめられ、その威光は地と天の上にあるからだ。148:14 主は、その民の角を上げられた。主の聖徒たち、主の近くにいる民、イスラエルの子らの賛美を。ハレルヤ。

興味深いですね、天と地のすべての被造物に賛美を導いています。これはまるで、天地すべてが一つのオーケストラとなって、交響曲を奏でているかのようです。しかし、もちろん声は出すことはできませんが、自然界は神に対してその栄光を歌っています。神の永遠とその創造の力のご性質が現われています。そしてこの栄光は、主イエスの御名に集まります。「黙示 5:13 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

しかし今、主の御民になっている者たちは、先んじて神をほめたたえる使命と特権を与えられています。「その民の角を上げられた。」とあります。角とは、力や權威を表しています。主の民とされた者たちは、天地万象の賛美に先んじて、イエスを主として、父なる神をあがめているのです。エルサレムに帰還したユダヤ人たちは、自分たちの存在の小ささに気落ちしていたかもしれませんが、自分たちが、ここにおいて何の役に立つのかと思ったかもしれません。それは私たちが、この日本において少数派であり、主に仕えていてどれほどの影響力を持っているのかを悩んでしまうのと似ていると思います。しかし、大きな働きが与えられています。被造物の全ての初穂として、その

全体の代表として私たちが今、主なる神に賛美を捧げているのです。

5A 御民の賛美 149

そして、149 篇は神の民が捧げる賛美に注目しています。

1B 新しい歌 1-4

149:1 ハレルヤ。主に新しい歌を歌え。聖徒の集まりで主への賛美を。149:2 イスラエルは、おのれの造り主にあつて喜び。シオンの子らは、おのれの王にあつて楽しみ。149:3 踊りをもって、御名を賛美せよ。タンバリンと立琴をかなでて、主にほめ歌を歌え。149:4 主は、ご自分の民を愛し、救いをもって貧しい者を飾られる。

主に対する「新しい」歌です。なぜ新しいのかと言いますと、それは他の様々な歌がある中で、主との関係を持っている者だけが歌うことができるものだからです。小羊の前に立つ十四万四千人の神の僕は、彼らとイエス様との関係があまりにも親密だったので、その新しい歌はだれも学ぶことができなかつた、とあります(黙示 14:3)。ですから私たちは、ただ聞いたことがあるのを反復するだけの歌であれば、新しい歌とはなりません。以前、歌ったことがあるものでも、主との関係を確かめるように歌うのであれば、それは新しい歌です。

そして、午前礼拝で話しましたように、聖徒たちが神を賛美できるのは、この方が自分たちを造られた神であり、また自分たちの王であるからです。自分が造られた者として神に全く依存している、またすべての主権は神にあることを知っている時に、私たちは神を新しい歌で賛美することができます。

それから、踊りをもってほめ歌えとあります。かつてミリヤムがタンバリンをもって女たちが踊りながら、主の勝利の歌を歌いましたね。ダビデも主の前で踊りました。私たちは、神の真理をなぜ歌うのか？詩篇の学びをしている時に、詩編そのものを歌う音声を見つめました。145 篇のダビデの賛美です。メロディーを付けるだけで、全然、その言葉の重みが変わります。言葉で言い表すだけでなく、魂にその真理が沁みこみます。さらに楽器を奏でるなら、さらに賛美が豊かになり、踊りになれば体をもって神をほめたたえることができます。イエス様は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。(マルコ 12:30)」と言われました。知性だけでなく、心を尽くし、思いを尽くし、そして力を尽くして愛さないといけないということです。いかがでしょうか、賛美をして、交わりをして、そして共に時間を過ごす。共に祈る。

そして午前礼拝の箇所、4 節ですが、主がこのような民を愛して喜んでおられて、「救いをもって貧しい者を飾られる」とあります。この「飾る」という言葉は、「神の輝きを与える」という意味です。素晴らしいですね、今朝もお話しましたが、主が花嫁のようにご自分の輝きをもって私たちを救って下さいました。しかも、富んだ女ではなく、貧しき者、何もない者が神の栄光の輝きを着せて

いただいたのです。

2B 諸刃の剣 5-9

149:5 聖徒たちは栄光の中で喜び勇め。おのれの床の上で、高らかに歌え。

神の栄光を見て大いに喜んでいます。そして興味深いのが、「床の上で、高らかに歌う」ことです。これは布団の上ということではなく、ソファあるいは寝椅子と訳すことができます。当時のイスラエルの世界、また新約時代もそうですが、ゆったりと寝そべる椅子がありました。それは、自由人であることの証拠であり、過越の祭りは横になって食事をしました。つまり、ここで彼らは神の圧倒的な勝利の中で、敵の虐げから全く救われ、守られている形で安息している姿です。

149:6 彼らの口には、神への称賛、彼らの手には、もろ刃の剣があるように。149:7 それは国々に復讐し、国民を懲らすため、149:8 また、鎖で彼らの王たちを、鉄のかせで彼らの貴族たちを縛るため。149:9 また書きしるされたさばきを彼らの間で行なうため。それは、すべての聖徒の誉れである。ハレルヤ。

イスラエルの民は、帰還後、敵に囲まれてエルサレムで生活していました。ネヘミヤ記を見ると、彼らは城壁の工事をする時に、片手には武器を持ちながら工事をしていたのです。そして、帰還民は主への賛美に献身しながら、終わりには敵がことごとく滅び、そして神に国々が服することを信じて賛美していました。

したがってこれは霊的な戦いです。主への賛美を通して、主の御国がそれに反抗する敵どもをことごとく打ち倒していく歌です。そして神の御国の中でそうした国々を強く治めていく歌です。教会というのは、この地上において地獄の勢力との戦いで勝利をするために立てられています。「マタイ 16:18 わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」ハデスの門、つまり死者を教会から出したとしても、決してその勢力は教会に打ち勝つことはできない、ということです。キリストの十字架は、人を悪魔の支配から、その死の恐怖から救い出します。サタンやその勢力を晒し、勝利の行進の中で歩かせます。

有名な讃美歌があります。Onward Christian Soldiers「見よや十字架の」という歌です。一番と二番だけ読みます。

見よや、十字架の 旗高し 君なるイエスは 先立てり 進め、つわもの 進み行き 雄々しく仇(あだ)に 立ち向かえ <i>Chorus:</i>
--

勇め、つわもの いざ勇め
十字架の御旗(みはた) 先立てり

イエスの御旗を 掲げなば
仇はおののき 逃げ隠れ
たたえの声の 勢いに
陰府(よみ)の礎(いしずえ) 揺り動かん
Chorus

6A 楽器を奏でるほめ歌 150

それでは最後の詩篇です。詩篇の最終として、あらんばかりの賛美を捧げています。

150:1 ハレルヤ。神の聖所で、神をほめたたえよ。御力の大空で、神をほめたたえよ。150:2 その大能のみわざのゆえに、神をほめたたえよ。そのすぐれた偉大さのゆえに、神をほめたたえよ。

148 篇と同じです、天が神を賛美しているのですから、神の聖所における賛美だけでなく、大空でも賛美します。そして145篇のダビデと同じように、その大能のわざと偉大さをほめたたえます。私たちの教会ではまだ野外礼拝をしたことがないですが、野外礼拝には醍醐味があります。天地が神を賛美する中で、私たちが口を使って神を賛美していることです。

150:3 角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。十弦の琴と立琴をかなでて、神をほめたたえよ。150:4 タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。150:5 音の高いシンバルで、神をほめたたえよ。鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ。150:6 息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。

あらゆる楽器を使って主を賛美します。ダビデが神の箱をエルサレムに運ばせた時にも、あらゆる楽器が使われていました。なぜか？天において楽器に賛美があるからです(黙示 5:8)。そして最後は、神のくださった最高の楽器、すなわち私たちの息、歌声であります。なんという、すばらしい終わりでしょうか。すべてはただ、主をほめたたえることです。すべてのことは主に栄光です。ハレルヤ。